



Title	itとthatについて
Author(s)	高橋, 英光
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 108, 101-121
Issue Date	2002-12-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34036
Type	departmental bulletin paper
File Information	108_PL101-121.pdf



it と that について

高 橋 英 光

1 はじめに

認知言語学は語用論とどこがちがうのだろうか。認知言語学は機能主義とどこがちがうのだろうか。認知言語学は語用論の一種のように考える人もいる。また、機能主義と認知言語学の関係についても、その見方は一様ではない。

これらの問題を考えるひとつの糸口として、英語の指示語の it と that と談話の理解の問題を取り上げたい。このふたつの指示語は、いずれも談話の中で命題内容とも名詞句とも照応するなどかなりの重複がある (Kamio & Thomas (1998: 289-290) を参照)。その使い分けは日本人の学習者にとっても多いに頭を悩ませる問題である。

たとえば、

(1) a Steve: Kate, will you marry me? We were made for each other.

Kate: That's/*It's quite a line, Steve. You mean fate brought us together?

では that しか使えない。ところが会話が (1 a) にひき続いて

(1) b ...

Steve: That's exactly what I mean. We are the perfect couple.

Kate: We've had a few nice dates. But marriage is a big commitment.

Steve: Sure it/*that is. But I'm ready to take the plunge.

となると、it しか使えない。しかし逆に、

(2) Luke: Who put this bottle of mouthwash on my desk, Sharon?

Sharon: I don't know, Luke. Maybe someone who thinks you might like to try it.

Luke: Why would I need mouthwash? I brush my teeth twice a day.

Sharon: Sometimes that/it's not enough, especially for people who love garlic as much as you do.

のように、it と that がどちらも使える文脈もある。

ここでは、it と that の談話用法に議論を絞り、語用論、機能主義、認知言語学のそれぞれの理論が上の(1)(2)のような使い分けをどのように分析するかを比較・対照してみる。比較・対照をとおして、認知言語学が語用論や機能言語学とどこに接点があるのか、また利点は何なのか、を明らかにしたい。

2 語用論と機能主義の it/that 分析

まず、Ariel (1988 ; 1990) の「接近性の階層 (accessibility hierarchy)」と Gundel et al (1993) の「既知性の階層 (The Givenness Hierarchy)」を見よう (2.1 および 2.2)。いずれも、it と that そのものの研究ではないが、指示語の体系的な、かつ類型論的な語用論研究の代表作として注目し値する。つぎに 2.3 で見る Kamio & Thomas (1998) は it と that の談話用法を詳細

に扱った機能主義的な研究である。

2.1 Ariel の接近性の階層

Ariel は、指示語は「接近性の階層 (accessibility hierarchy)」という観点から分析することが有効であることを主張している。この考え方は、文脈の種類する従来の分析法には限界があるという経験的事実に基づいている。「接近性の階層」とは、言語情報の処理における労力と効果、つまり関連性理論の立場から指示語を定義する試みとも言える。

接近性とは、ある指示語が指示対象を理解する時の容易さの程度である。「高い接近性標識 (high accessibility marker)」とは、指示対象へ容易に接近 (復元) できるという合図である。代名詞 (s/he) などが一般に旧情報を指すのに使われるのはこのためである。逆に「低い接近性標識 (low accessibility marker)」とは、指示対象へ簡単には接近できないという合図である。完全な名詞句 (John Smith, the president of my company) が新情報を指すのに使われやすいのはこのためである。

表 1 を見よう。

表 1 Ariel (1988/1990) の接近性の階層

Low Accessibility	
Full name + modifier	<i>John Smith, the president of mycompany</i>
Full name	<i>John Smith</i>
Long definite description	<i>the president of my company</i>
Short definite description	<i>the president</i>
Last name	<i>Smith</i>
First name	<i>John</i>
Distal demonstrative	<i>that</i> (Intermediate accessibility marker)
Proximal demonstrative	<i>this</i>
Stressed pronoun	<i>SHE</i>
Unstressed pronoun	<i>she, he, it</i> (High accessibility marker)
Cliticized pronoun	<i>'e, 't</i>
Gaps, PRO, wh traces, reflexives	
High Accessibility	

この階層の中で、it は「高い接近性標識」、that は「中の接近性標識」とそれぞれ特徴づけられている。it は話題や焦点を指すことが多いのは、話題や焦点はきわ立つので、指示対象の理解／復元が容易だからである。that は、逆に非話題や非焦点を指すことが多いが、それは非話題や非焦点はさほどきわ立たないので、指示対象の理解／復元がややむずかしいためである。

たとえば、

- (3) a First square 19 and then cube it. (it=19 or the square of 19)
 (3) b First square 19 and then cube that. (that=the square of 19)

で、it には2つの解釈があり、「19」か「19の二乗」であるが、that だと1つの解釈「19の二乗」しかない。Ariel (1990:25)によれば、that は「中の接近性標識」で確立していない対象、つまり楽に復元できない概念を指示するためである。

2.2 Gundel et al (1993) の既知性の階層

次に、Gundel et al (1993) の「既知性の階層 (The Givenness Hierarchy)」を見よう。

表2 Gundel et al (1993) の既知性の階層

in			uniquely		type	
focus	>	activated	>	familiar	>	identifiable
{ <u>it</u> }		{ <u>that</u> /this/}		{that N}		{the N}
{she/he}		{this N}				{indefinite this N}
						{a N}

既知性の階層は、一般に旧情報とされるものにはさまざまな段階があることを精密に特徴づけた試みである。Gundel et al は、表のような特徴づけを認知的地位 (cognitive status) と呼び、そのおのおのが該当する指示語を使うための必要十分条件とする。

この階層では、that は「活性化」された対象を、it は「焦点」になってい

る対象を表わす。「活性化」された指示対象とは、短期記憶の中の表示であり、活性化はすべての代名詞形の適切な用法のために必要であり、強勢のある代名詞および指示代名詞 that を使うための十分条件である。なお、活性化は言語的文脈からでも非言語的文脈、つまり外界からもおこりうると述べている (Gundel et al (278) を参照)。

「焦点」とは、指示対象が短期記憶にあるのに加えて注意の中心でなければならない。これがゼロ形式、および強勢のない代名詞の適切な使用のための条件である。談話のある時点で「焦点」となっている指示対象とは、「活性化」された対象の集合の一部であり、以後の発話の中でも話題であり続けることが多い。

たとえば

- (4) a My neighbor's bull mastiff bit a girl on a bike.
- b It's/That's the same dog that bit Mary Ben last summer.

では、“My neighbor's bull mastiff” が主語（でかつおそらく話題）なので、it も that も使える。しかし、

- (5) a Sears delivered new siding to my neighbors with the bull mastiff.
- b # It's/That's the same dog that bit Mary Ben last summer.
- c Anyway, this siding is real hideous and ...

では“the bull mastiff” が前置詞句にあり話題ではない、つまり注意の中心でない。そのため、that は使えるが it は使えない (Gundel et al (280) を参照)。

ただし、ある要素が話題かどうかは語用論的な問題であり、

- (6) a However, the government of Barbados is looking for a project

manager for a large wind energy project.

b I'm going to see the man in charge of it next week.

のような文脈では、it が “a large wind energy project” を指すことからわかるように文の話題が主語とはかぎらないとつけ加えている (Gundel et al, 280)。

2.3 Kamio & Thomas 1998 の機能主義的分析

つぎに、機能主義の分析を見よう。Kamio & Thomas 1998 は、that と it の指示特性を豊富な実例に基づいて詳細に分析している¹。Kamio & Thomas の主張の要点は、おおむねつぎの2点に要約できると思われる。

第一に、it は「処理済みの(中心的)情報」を指す。このため、会話に先立って所有する知識を指すのに使われることが多い。that はそうではなく「処理中の(やや周辺の)情報」を指す傾向が強い。

たとえば、

(7) A: Guess what! I just won the lottery!

B1: *It's amazing!

B2: That's amazing!

では、B 2 が自然な答えである。B 1 は、B が A がくじに当選した事実をあらかじめ知っている場合なら適切である。上の例(3)について、Kamio-Thomas は、it は 19 の解釈のみ、that は新しく喚起された実体 “the square of 19” になる。理由は it は先立ってもっている知識を扱うため、と述べている。

第二に、it は「(推論を時に含む) 広い指示」で、that は「(推論を含まない) 狭い指示」とする。(8)は、乳母車の赤ちゃんを世話している若い父親を見ている壮年の父親とその娘の会話である。

(8) Father: Look at that! There's some young guy taking care of his own kid!

Daughter: You see that/it a lot around here, Dad.

ここで、that と it には意味の違いがある。that は、その特定の場面だけを指すが、it はそれに加えて社会全体の子育ての風潮まで示す (Kamio & Thomas, 296-7)。

ここまでの先行研究の論点を表3でまとめよう。

表3 語用論と機能言語学分析

	It	That
〈語用論的分析〉		
Ariel の接近性の階層	「高い接近性」	「中の接近性標識」
Gundel et al の既知性の階層	「焦点」	「活性化」
〈機能言語学分析〉		
Kamio-Thomas	「話者にとって処理ずみの	「話者が処理中の(周辺の)
	(中心的) 情報」	情報」
	「指示拡散的 (推論含む)	「指示集中的 (推論なし)
	(=広い指示)」	(=狭い指示)」

ここまでの観察からつぎのことが言えるだろう。(i)語用論と機能言語学分析はそれぞれすぐれた洞察を含み互いに重複や相補性がかなりある。(ii)語用論と機能言語学分析はきわ立ち、記憶、情報の処理などの認知心理的な現象への言及をしている。(iii)語用論と機能言語学分析は it と that の使用条件を明確に規定し、その適格性の予測能力はそれぞれすぐれている。たとえば、例(1)の it と that の使い分けはどの理論でもある程度予測できる。

しかし、少なくとも以下の問題が残る。

A) 話題とは何か。どの分析も「話題」の概念に依存しているが、話題の定義が明確になされていない。また、話題を非話題をどう区別するか。また話題が複数ある文脈をどう扱うのか。

- B) it はなぜ「高い接近性」「焦点」「処理ずみの情報」などの特性を持つのか。
that はなぜそうでないのか。先行研究は it/that それぞれの使用条件や指示特性に原理づけられた説明を与えていない。
- C) B) の問題は、it と that それぞれの意味価値はなにかという根本的な問題につながる。

語用論と機能主義は、it と that の使用条件や指示特性を明らかにしたのは確かである。しかし、it と that の意味価値を十分に明らかにしたわけではない。以下の議論では、認知言語学の分析は it と that の意味価値を明らかにできることを主張する。イメージスキーマ的意味記述をすることにより、it と that の使用条件と指示特性に原理づけられた説明を示すことを示す。

3 it/that の認知言語学分析

認知言語学には今のところ指示語の体系的な理論はない。しかし、認知言語学が提供する道具立ての「具体性の度合」と「きわ立ち度」、と筆者が本論で提案する「記憶の領域」という3つのパラメーターを使い、it と that の意味構造（イメージ・スキーマ）を提案する。

3.1 具体性の度合 (specificity)

it と that の分析に有効と思われる道具立てのひとつは、「具体性の度合 (degree of specificity)」である。「具体性の度合」とは、人間が言語を使用する際に使う基本的な認知能力のひとつであり、「ものごとの捉え方 (construal)」の一種である (Langacker (1987; 1991)を参照)²。目の前にパソコンがあるとしよう。これを “Macintosh - personal computer (PC) - machine - thing” と異なる抽象度で表現できる。このように、同一のものを異なる抽象度でとらえることである。

これまであまり具体性の度合は代名詞の特徴づけには十分に応用されてこなかった。しかし、代名詞は一般に名詞よりも抽象度が高いことは明らかで

ある。語の抽象度・具体度を測るひとつの基準は語の情報量である。かりに同じ対象を指す2つの語AとBがあったとすると、もし、AがBよりも情報量が少ないならAはBよりも具体度は低いことになる。すると、代名詞 it は名詞 machine よりも情報量のはるかに少ない (van Hoek 1997 などを参照) ので、代名詞は名詞より具体度は低いことになる。すると問題は共に代名詞である that と it はどちらが具体度が低いかである。(9)を提案しよう。

(9) it は that より具体度が低い。

逆に言えば, it は that より抽象度が高い。この分析の根拠のひとつは, that は it より音量が多いことにある。図像性の原理 (iconicity) (Haiman 1983, Givón 1991 などを参照) を考えよう。かりに2つの言語形式AとBが同一の実体を表わすとしよう。この時、もしAがBより音量が多いならば、AはBより意味量が多いことになる。このような場合は意味量が多いことは具体度の高さの裏返しである。

この分析を支持する事実がある。(10)の会話を見よう。

(10) A: You are slipping a little on punctuality. You've been late a lot recently. Why's that?

B: Well, it's probably the baby. I've not been getting a lot of sleep recently.

Aのセリフの that はだいたい'B has been late a lot recently'という命題内容を指しているが、Bのセリフの it は同じことを繰り返している。このように that の内容を it で言い換えることはしばしば観察される。これをもし逆にすると奇妙な談話になる。

(11) A: Is marijuana smoking that much of a problem?

B: Yes. It can be dangerous in terms of workplace safety and

efficiency. It/*That slows down physical reflexes, diminishes mental power, and makes you forgetful.

(11)のように、it が指す内容を that で言い換えると奇妙である。一般に、同じ事柄を繰り返すには、内容の「軽い」語、つまり抽象度を高くするのが原則である。

前文の it の内容を that で繰り返すのが不適格な理由は、前の文の代名詞を固有名詞で繰り返すことが不適格な理由と同じである。

(12) a John went into the study. He picked up the phone.

(12) b He went into the study. # John picked up the phone.

(12 b) では代名詞 (He) が指す内容を名詞 (John) で繰り返すしている。同じ対象を指すには具体度を上げてはならない。

3.2 きわ立ち度 (salience)

きわ立ち度も「ものごとの捉え方 (construal)」のひとつである (Langacker (1987; 1991) を参照)。これは、言語構造を構成する要素の間にはつねにきわ立ち度の不均衡があるという考え方である。

周知のように、Langacker はもっともきわ立つ実体を第一参与者 (trajector) と呼び、それ以外を第二参与者 (landmark) と呼んでいる。たとえば語句レベル (the big car in the garage) の第一参与者は主要部 (the big car) で、第二参与者は修飾語 (the garage) である。節レベル (Sally met Nina at the supermarket) の第一参与者は主語 (Sally) であり、第二参与者は目的語 (Nina) である。複文レベル (Sally came in before Nina arrived) の第一参与者は主節 (Sally came in) であり、第二参与者は従属節 (Nina arrived) である。

「きわ立ち度」のいう概念は、これまであまり談話に応用されてこなかった。しかし、認知言語学の大きな特徴は、統語 (syntax) と談話 (discourse) の

連続性にあるから、第一・第二参与者という理念を談話にも応用することができる。さて、この第一参与者を談話にあてはめると、そのまま「話題」の定義となる。つまり、

(13) 話題とは談話の第一参与者である。

と定義できる。

この見方によれば、話題が談話の中で複数ある時はそれぞれ「第一参与者」「第二参与者」と扱うことができる。ひとつの文中に it と that が共起する(14)の B 1 を観察しよう。

(14) A: I don't see why the company would want to pay for first-class travel. It's just a wider seat and better food service.

B1: Oh, it's a lot more than that.

B2: *Oh, that's a lot more than it.

ここでは、it は第一参与者、that は第二参与者という役割分担を見ることができる。it は “first-class travel”，that は “a wider seat and better food service” を指し、“first-class travel” は文脈の全体的な話題 (global topic) だが、一方 “a wider seat and better food service” は局所的話題 (local topic) である。

このように、it は全体的話題を指すときは that は局所的話題を指すという役割分担は、それぞれの語の指示対象のきわ立ち度の違いから生じていると言える。つまり、

(15) it の指示対象は that の指示対象よりきわ立つ。

と提案できる。

つぎのような類似した半イディオム的な表現でも同様の使い分けが見られ

る。

- (16) It's a lot more than that./ *That's a lot more than it.
There's more to it than that./ *There's more to that than it.
That figures into it./ *It figures into that.
It's not only that./ *That's not only it.
That did it./ *It did that.
That explains it./ *It explains that.
That's the end of it./ *It's the end of that.
It's just as simple as that./ *That's just as simple as it.

it は第一参与者と that は第二参与者という使い分けは、ここでも一貫している。

話題とは従来の語用論の中で明確な定義がされてこなかった。しかし、「きわ立ち度」という認知的なパラメータを使うと、指示語の「抽象度」とその指示対象の「きわ立ち度」を正比例の関係でとらえることが可能になる。

3.3 記憶の領域 (scope of memory)

記憶が、長期記憶と短期記憶に分けられることは良く知られている。しかし筆者が知る限り、とくに短期記憶についてそれ以上詳細な分類はないようである。さて前に述べたように、Gundel et al は it も that も短期記憶内の表示を指すと説明している。しかし実例を見ると、it と that をただ短期記憶とするだけでは不十分である。それぞれの語が扱える記憶の範囲には明確なちがいがある。たとえば

- (17) A: The problem with this diet is that it's just gross! This morning, I had a cheese omelet thick with sausage.

B: I love eggs and sausage. Don't you?

A: Not day after day. It's just so heavy and greasy.

B: Well, why can't you just vary what you eat?

A: With what? I can't have orange juice. Or toast. Or any kind of cereal.

B: That does sound somewhat extreme. It can't be too healthy.

では、it／that とその先行詞との距離の許容範囲のちがいが顕著である。たとえば、Aの二回目の発言の中の it は四文も前の文の発言内容（おそらく“a cheese omelet thick with sausage”）を指している。

しかし、Bの三回目の発言の中の that を見よう。指しているのはすぐ直前の発言内容 “I can't have orange juice. Or toast. Or any kind of cereal” である。一般に、that は

(18) The food started to burn. That set off the smoke alarm. And that woke up Mariah.

のように直前の発言を次々と指すのが本業だが、it のように前文を飛び越えて照応することができない。たとえば(19)の B 1 の that を見よう。

(19) A: When the school makes volunteer work obligatory, it loses its meaning.

B: Aren't you being a bit of a stickler? What's wrong with getting school credit for it?

A: I believe that volunteer work should come from the heart.

B1: That's just naive. Not all good acts need the purest intentions!

(B2: Not all good acts need the purest intentions! # That's just naive.)

that は直前の A の発言 “I believe that volunteer work should come from

the heart.”を指している。かりに、これを操作してB 1 の2つの発言入れ替えて見よう。that を理解するにはひとつ文を飛び越えなくてはならなく照応はむずかしくなる。

このことから、that は短期記憶のすべては網羅できないことが明らかである。目下の、きわめて狭い、直前の記憶しか指示できない。この短期記憶の中の一部に限定された狭い記憶領域を「即時記憶」と呼ぼう。すると

(20) it は短期記憶内の対象を、that は即時記憶内の対象を指示する。

を提案できる。

最後に、that の正確な意味記述には this とのちがいに触れる必要がある。実際、ここまでの that についての本節の認知言語学的な分析は this にもそのままあてはまる。this も that と同じく2番目に際立つ要素を指示する傾向がある。たとえば(21)のように

(21) a We keep the ice-cream machine in the spare room. It is mainly used by the children, incidentally.

(21) b We keep the ice-cream machine in the spare room. That/This is mainly used by the children, incidentally.

(Swan (1995) *Practical English Usage*)

it は the ice-cream machine を指すが that も this も the spare room を指す。

that が this とちがうのは、談話用法の that は「話者のなわばり外の情報」を指すところにある(神尾(1990:160-162)を参照)。(22)から(24)はすべて that と this の違いを示す例である。

(22) So She decided to paint her house pink. This really upsets the neighbours so much that they took her to court, believe it or not.

The case came up last week ...

- (23) Then in 1917 he met Andrew Lewis. This was a turning point in his career: the two men entered into a partnership which lasted until 1946, and ...

Swan (1995) によれば, this は話者がその指示対象について話すことがた
くさんある時に使う。したがって, ここでは this が that より自然である。this
は話者にとってなじみのある情報, 心理的に近い情報を好む。神尾の分析に
よれば, 話者だけのなわばり内の情報である。

this のみに(24)のような後方照応が許されるのもこのためであろう。

- (24) Well, you might not believe this/*that but I don't drink very
much.

後方照応とは, 話者だけが知る情報を先取りする用法であるから, 「話者の
なわばり内の情報」を扱う this でなければならない。

that はそうではない。Collins Cobuild English Grammar (1990 : 387) は
「this は話者と指示対象をむすびつけるが, that は話者と指示対象とにかす
かな距離を置く」と言う。

- (25) a There's a lot of material there. You can use some of that.
(25) b 'You're the new doctor, aren't you?'-'That's right.'
(25) c 'Do you think he lied?'-'That's a hard question to answer.'

(25)b, c は that の即時記憶性の表われだけでなく, 相手の発言を話者が自分
のなわばりの外に位置づけていることの反映とも思われる³。

以上の認知言語学の分析を表 4 にまとめよう。

表 4 認知言語学の分析

	it	that
指示語の具体度：	きわめて抽象度が高い	抽象度高いが it より低い
対象のきわ立ち度：	きわめてきわ立つ	ある程度きわ立つ
記憶の領域：	短期記憶	即時記憶
(対象のなわばり)	N/A	話者のなわばりの外)

これまでの議論から, it と that の意味構造は図 1 のようなイメージスキーマで示すことができる。

左は that で右は it の意味構造である。矢印は指示 (心的接触) を示している。左では太く右では細い。これは that が it より具体性が高いこと, 音量の大きさを示す。

小さい円は指示対象を示し, うすい円はきわ立ち度の低さ, 太い円はきわ立ち度の高さを表わす。

× (バツ) は指示不能を示す。that ではバツが即時記憶外の円にある。こ

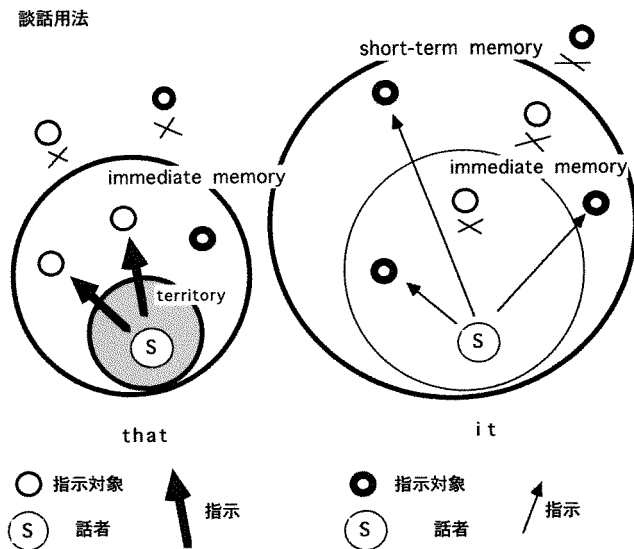


図 1: it と that の意味構造

これは直前の発言内容を飛び越えて指示できないことを表わす。(19)の B 2 がこれに当たる。黒く塗りつぶされたのは「話者のなわばり内」であり this の領域である。(22), (23)や後方照応の(24)がこれにあたる。

右の it の図は基本的に対象がきわ立つ事物で、かつ短期記憶内というふたつの条件を満たせば it で指示できることを示す。たとえ、短期記憶内であってももし対象のきわ立度が不十分なら指示できない。(1a) (5b) (7)や、(21a)で it が the spare room を指示できないのもこれに当たる。

4 語用論・機能主義と認知言語学の接点

2 節の最後で述べた疑問に認知言語学はつぎのように答える。

A) 話題とは、談話の第一参与者 (discourse trajector) である。話題と非話題の区別も全体話題と局所話題などの現象も「きわ立ち度」のちがいに還元される。

B) it/that の使用条件や指示機能はそれぞれのイメージスキーマ的な意味価値から生じる。

C) it/that の意味価値とは、表 4 および図 1 のようなものである。

B) について少し詳しく述べよう。

i) it の「高い接近性標識」「焦点」「処理ずみの (中心的) 情報」は、主に it の「抽象度の高さ」から生じる。it は抽象度が高く指示する力は弱い。だから「焦点」や「処理ずみ (中心的) 情報」のようなきわ立つ対象が指さない。

ii) that の「中の接近性」「活性化」「処理中の (周辺の) 情報」は、that の「中の抽象度」から生じる。it よりはきわ立たない対象に適している。

iii) it の「指示拡散性 (推論)」は、it の本来的な「非直示性」と「抽象度の高さ」の両方から生じるのではないか。指差するような機能をもたないので、特定の場面を越えて幅広い対象 (非人間や命題内容) を網羅する。

iv) that の「指示集中性」は、that の「中の抽象度」と「即時記憶」から生じるのではないか。that はもともと指差す言葉であり発話の時間と場所から離れにくい。指示の拡散は起こらない。

Kamio (1990) では、なわばりが関与する that となわばりが関与しない that があるとする。しかし、認知言語学の立場から言えば、文脈との相互作用で話者からの「遠さ」が強く意識されたりされなかったりするわけで that の意味価値は一貫していると考えることができる。

最後に、日本語の指示語の分析への応用可能性を述べよう。日本語学では「あ系」「そ系」「こ系」に分け、なわばり、直示用法／文脈用法、短期記憶と長期記憶などが議論されている（久野（1972）、黒田（1979）、安藤（1986）、金水（1999）などを参照）。

もし、本発表で提案した認知言語学的パラメーター「対象のきわ立ち度」「指示語の具体度」「記憶の範囲」を説明原理として適用すれば、より豊かな分析ができる可能性がある。結論的に言えば、

- 談話用法の「あれ」は英語の that とちがいで即時記憶を扱わない。
- 談話用法の「それ」は即時記憶を扱い、具体度が高い点で、英語の it よりは that のイメージスキーマに近い。
- 日本語には英語の it に相当するような高い抽象度の指示語が存在しない。

と言えるだろう。

このため(26)の英語を日本語にすると that は「あれ」ではなく「それ」（又は普通名詞）になる⁴。

(26) The English spoken in rural Georgia is quite different from that of rural Indiana.

(26)' ジョージア州の田舎で話される英語はインディアナ州のそれ／*あれ／英語とはまったく違う。

また、(27)の英語を日本語にすると it はゼロ表現に、that は「それ」になる。

(27) A: I don't see why the company would want to pay for first-class travel. It's just a wider seat and better food service.

B: Oh, it's a lot more than that.

(27)' B1: (ファーストクラスは) それだけではないですよ。

B2: *それは*あれだけではないですよ。

一般的に、認知言語学のこれまでの功績と今後の課題について一言つけ加えたい。功績のひとつは、語や文法の意味構造を明示化することを可能ならしめたことであろう。これは、従来の言語学、形式言語学はもちろん、語用論も機能主義も十分にできなかったことである。

今後の課題は山積している。そのひとつは、言語を分析する角度／視点の整理ではないだろうか。言語研究には分析者の暗黙の視点があるという。(A)記号そのものから、(B)聞き手から、(C)話者から、の3つである(Brown & Yule (1983: 215)を参照)。(A)は構造言語学や生成文法で、(B)は語用論でゆたかに行われてきた。しかし、(C)の「話者の立場からの分析」はつい最近まできわめて貧困であった。

認知言語学、とくに Langacker の研究が注目されてきたひとつの理由は、その射呈の広さとともに(C)の「話者の観点から」言語の構造や意味をゆたかに分析する原理を提供したためであろう。たとえば、Langacker は概念主体 (conceptualizer) を「一義的に話者で二義的に聞き手」と定義している。しかし、実は、話者よりの、話者だけを念頭に入れた分析が多い。

話者と聞き手の過程がまったく同じであるはずはない。したがってより精密な、より包括的な言語学を目指すには、話者の認知過程と聞き手の認知過程の共通点と相違点を取り込めるような理論が必要になるだろう。

〈脚注〉

* この原稿を書くにあたり、インフォーマントとして適格性判断として下さった Joseph Tomei 氏と Jerald Pike 氏に深くお礼を申し上げたい。it と that の図像性のちがいは Tomei 氏の指摘による。また、この原稿は平成 12 年 9 月慶応大学にて行われた日本認知言語学会創立記念大会シンポジウムにおける発表原稿に若干の加筆を施したものである。多くの有益な助言をくださった参加者に心より感謝したい。

¹ 神尾 (1990) の『情報のなわ張り理論』では、that に二種類を認めている。ひとつは、this と二項対立をして「遠い情報」を指す。もうひとつは、it と二項対立をして「指示集中的」に指す。前者の that は話し手のなわばり外の情報を表わすが、後者の that ではなわばりが関係しないとする。

² 古くは、S. I. Hayakawa が「抽象のはしご (abstraction ladder)」として同様のことを述べている。

³ なお、「話者のなわばり外の情報」とは「聞き手だけのなわばり内」か「両者のなわばり外」であろう。安藤 (1986: 214) は that も「そ系」も「聞き手のなわばり」を扱うと分類している。

⁴ 安藤 (1986) も「あれ」には談話用法がないという考え方を示している。なお、英語の it と日本語の「それ」の比較については上山 (2001) を参照。また、高橋 (to appear) では先行研究における「それ」「あれ」の分析と認知言語学的分析をより詳しく扱っている。

〈参考文献〉

- 安藤貞雄 (1986) 『英語の論理・日本語の論理』大修館書店
- Ariel, M. (1988) 'Referring and accessibility', *Journal of Linguistics* 24, 67-87.
- Ariel, M. (1990) *Accessing Noun-Phrase Antecedents*. Routledge.
- Brown, Gillian & George Yule (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fauconnier, G. (1994) *Mental Spaces*, Cambridge University Press.
- Gundel, J. K., N. Hedberg & R. Zacharski (1993) 'Cognitive Status and the Form of Referring Expressions in Discourse', *Language* 69-2, 274-307.
- Hayakawa, S. I. (1939/1978) *Language in Thought and Action*. Harcourt Brace Jovanovich.

- 神尾昭雄 (1990) 『情報の縄張り理論』大修館書店
- Kamio, A. & M. Thomas (1998) 'Some Referential Properties of English It and That', *Function and Structure*. (eds.) A. Kamio & K. Takami, John Benjamins, 289-315.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』Vol. 6, 4, 67-92.
- 金水敏, 田窪行則 編 (1992) 『指示詞』ひつじ書房
- 久野暲 (1972) 『日本文法研究』大修館書店
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『英語と日本語と—林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版, 41-59.
- Lakoff, R. (1974) 'Remarks on this and that', *Chicago Linguistic Society* 10, 345-356.
- Langacker, R. (1987; 1991) *Foundations of Cognitive Grammar I & II* Stanford University Press.
- 小島義郎 (1988) 『日本語の意味 英語の意味』南雲堂
- Swan, Michael (1995) *Practical English Usage*. Oxford University Press.
- Sweetser, E. (1988) 'Grammaticalization and Semantic Bleaching'. *Berkeley Linguistic Society* 14, 389-405.
- 高橋英光 (to appear) 「指示語の理解—英語の it と that : 語用論・機能主義と認知言語学の接点」大堀壽男 編『認知コミュニケーション論』大修館書店
- 上山恭男 (2001) 「代名詞 it の指示特性 : 「それ」との比較による it の理解」『函館英文学』第 40 号
- Prince, E. (1981) 'Toward a taxonomy of given-new information', *Radical Pragmatics*. (eds.) P. Cole, Academic Press, 223-254.
- van Hoek, Karen (1997) *Anaphora and Conceptual Structure*. Chicago: University of Chicago Press.